



# 小児緩和とグリーフケア

臨床心理士  
西尾 温文

## 子どものグリーフケア

1982年にアメリカオレゴン州に設立されたダギーセンターをモデルにしたエッグツリーハウスについて第16号でふれました。エッグツリーハウスはグリーフケアのプログラムをたまごの時間と呼んでいます。たまごの時間は、月1回小金井公園のそばのお寺のお堂を借りて行っています。

昨年度のたまごの時間計11回の参加者数は、子どもが40名、大人が61名でした。参加者の死別の特徴は、脳腫瘍などの病気、NICUおよび重度障害での死別でした。

グリーフケアが求められる理由をたまごの時間に参加している子どもたち、保護者の言葉から考えます。

### 孤独感、孤立感

きょうだいを病気でなくした小学生Aちゃんの話です。車で90分以上かけて両親と参加しています。両親が車の中で話しました。今から行くところは、Aちゃんと同じようにきょうだいをなくした子が来ているところなんだよ。するとAちゃんが言いました。えっ、そんな子いるの。

Aちゃんはきょうだいをなくす子が自分以外にもいるなんて考えられなかったのです。死別体験は、孤独感、孤立感をもたらします。子どもは同じような死別体験をした子同士で遊び話すことで、たいせつな人をなくしたのは自分だけじゃないことを知り、気持ちがだんだんとほぐれていきます。

保護者の場合はどうでしょうか。たまごの時間は、子どもはお堂や公園で遊び、大人は本堂の部屋を借りて語り合います。Aちゃんのお父さんが涙ながらに子どもをなくした悲しみについて話しました。すると、それを聴いていた妻が、家ではこんなふうに関夫の話を聴いたことはなかった、夫の気持ちを始めて知ったと言いました。家庭では夫婦はそれぞれに悲しみに一人で耐え、お互いに相手の負担にならないようにしています。大人もまた同じような悲しみを抱いている人たちの中で、自分の気持ちに向き合え、表わすことができるのです。

死別体験を話すことは悲しくつらいことです。でも、悲しくつらい気持ちを話して理解してもらえるとという経験は、その人を支えてくれます。



### ▲みんなで輪(和)

子どもも大人も最後に輪を作ります。初めの人を決めてみんなが目をつぶり、その人が左右どちらかの人の手を握り、握られた人は次の人の手を握り、次々順番に握りが伝わっていきます。そして、初めの人に戻ったら、「来た!」と言って、みんなで目を開け拍手してその日のプログラムが終わります。



### ▲エッグツリーハウス

お堂の入り口で参加者を待つクマ君



### 子どものたまごの時間▶

紙版画のバッグ作り  
布製バッグに紙版画をして、オリジナルバッグ作り